

## 山口県公立大学法人評価委員会（第14回）の審議要旨

- 1 日 時 平成23年5月20日（金） 10:00～12:00
- 2 場 所 山口県庁共用第2会議室
- 3 出席委員 牛見委員長、呉委員、樋口委員、二木委員、松浦委員（50音順）
- 4 審議事項  
公立大学法人山口県立大学における中期目標（平成18年度～23年度）の達成状況（見込み）について

### 5 審議要旨 [ ● 委員    ◇ 委員長    □ 法人 ]

● それぞれの項目は非常に努力され、よく実行されているが、個々の項目が概ね100%達成できたとして、それで最終的な目標が達成できたかどうか少し分かりにくい面があるので、その辺りを工夫できないかと感じた。

● 地域貢献は、教員の研究成果の還元によるものだけでなく、卒業生の県内就職も重要と考える。ただ、卒業生の受け皿は限られているので、大学と連携をとりながら、県も「卒業生が活躍できる場の創出」について検討していただきたい。

□ 地域貢献の取組としては、まず、学生については、学外でのフィールドワークを通じて地域マインドを持った人材の育成に努めている。

教員は、県から委託されたテーマを研究してその成果を提供したり、各市町に出かけて公開講義等の取組を行っている。しかし、岩国や下関での県立大学の認知度はまだまだ十分でなく、引き続き努力していく必要があると考えている。

就職については、看護では、希望の多い先進的医療に携われる病院がどれだけあるか等、環境面の問題はあるものの、大学全体的に見れば、県内就職率は50%弱で、相当数が県内にとどまっている。

● 現中期計画は約200項目もの計画であり項目数が多い。現場の教職員が全体像をきちんと理解した上で取組を実施できているかが懸念されるので、次期中期計画はスリム化されて、教職員全てが全体を意識できるような形を検討していただきたい。

□ 先行の国立大学においても、第二期中期計画は項目を相当減らしている状況もあり、当法人においても、第二期中期計画は絞った形になるよう検討していきたい。

- 対処すべき課題として「県立の大学としての使命、個性・特色の明確化」や「教育研究等の質の向上」が挙げられているが、全体でまとめると抽象的になるので、学部ごとの目標設定、検討の体制づくりを検討していただきたい。
- 学部ごとに検討することにより、それぞれの項目に対する意識が高まってくるので、この点は、非常に重要と考えている。
- 高等学校は耐震化をやっているが、大学は中途半端になっている感がある。校舎自体の老朽化もあるので、大学の移転についても検討していただきたい。
- TOEIC の点数を数値目標として掲げられている点はすばらしいと思うが、一方で実際に英語を使ってみることが、語学や異文化、国際貢献に対する興味の喚起につながるということもあるので、英語の学びを実際に生かしていくといった、もっと広がりをもった目標設定も検討していただきたい。
- 留学生が山間部に出向いて交流を行う取組はとても良い。そうした留学生との繋がりが留学生の帰国後も維持できるような視点も必要である。また、外国の大学との関係を強める中で「ダブル・ディグリー」という方向性もある。そうしたものがあると、山口にいる学生や海外から来る学生にとっての魅力度がアップする。

(注) ダブル・ディグリー・プログラム

我が国と外国の大学が、教育課程の実施や単位互換等について協議し、双方の大学がそれぞれ学位を授与するプログラム  
 (中央教育審議会大学分科会大学教育の検討に関する作業部会大学グローバル化検討ワーキンググループの「我が国の大学と外国の大学間におけるダブル・ディグリー等、組織的・継続的な教育連携関係の構築に関するガイドライン」から転載)

- 「英語の勉強がどのように活用されているか」となるとなかなか答えが出ない。しかし、グローバル化した今日においては、英語教育は重要な課題であり、卒業生に英語でコミュニケーションできる程度の能力を持ってもらえるよう、次の計画でも考えていきたい。
- 他の大学で S 評価や A 評価を出したところがあるか。
- 承知していない。
- 第二期中期目標期間中に教員の退職が多くあるとのことだが、どの程度か。また、定年は何歳か。

- 1割ちょっとの教員が、第二期中期目標期間中に定年退職する。  
定年は65歳である。
  
- ◇ 今回の意見と次回（7月）審議する平成22年度実績の評価結果を踏まえ、事務局で第二期中期目標の素案を作成していただき、8月の評価委員会で審議する。

以 上